恋愛と縁むすびの神様

Lover's Sanctuary 恋人の聖地

織姫と牽牛の愛を見守り続ける「恋人の聖地」となった七夕神社へ出逢いの旅に出かけてみよう

七夕神社は、地元では親しみを込めて「たなばたさん」と呼ばれていますが、正式名称は「媛社神社」。その歴史は古く、八世紀頃の「肥前国風土記（730年頃）」にも登場しているほどの古社です。

その七夕神社には、媛社神（ひめこそのかみ）と織女神（しょくじょしん）が祀られており、織女神は機織りの技術を身に付けた方であると言い伝えられています。古代では、布を織る仕事が女性にとって最も重要な仕事であり、それ故に女性の信仰を集めた神であるとされています。

ところで、織姫と言えば、牽牛。中国には「天の川が地表に流れてきた川」と伝えられる「漢水」があり、これになぞらえて、七夕神社の東側を流れる宝満川の対岸には、かつて牽牛を祀る神社がありました。

宝満川を天の川に見たて、織女と牽牛を配する古代人の信仰のロマンが感じられます。

小郡市観光大使
オリリン・ヒコリン

恋人の聖地銘板

七夕神社の夏祭り

七夕神社では毎年8月7日に夏祭りがあり、当日は全国各地から願いが込められた約30万枚の短冊が飾り付けられ、多くの人でにぎわいます。

老松宮（牽牛社）

「七夕神社」から宝満川をはさむ対岸に七夕の故事にちなんで「牽牛社」が建立されていました。この牽牛社は、水害と周辺の圃場整備のため大正12年に稲吉地区にある老松宮に移され、合祀されました。
この老松宮には織女神と相思相愛の「犬飼神」の木像が祀られています。普段は見ることができませんが、「犬飼神」は、高さ41cm、横幅24.5cmの彩色された人物像で、牛とともに立体的に彫られています。

小郡市民まつり「七夕伝説」

織女神

犬飼神

先人達の遥かな時の流れを残す、歴史街道の街。

松崎宿

**江戸時代から幕末にかけて数多くの著名人が行き来した「街道の街」
現在も町並みは、それほど変わってはいません。
大名が通った参勤交代の道を散策してみよう。**

松崎の地名は、有馬豊範が御原郡十九ヵ村一万石の分知を受け、寛文十二年（一六七二）頃に郡内の「鶴崎」の地に居城を築き（現在の県立三井高校）、名を「松崎」と改めたことに由来します。

松崎藩の設置に伴って、北は山家宿、南は府中宿にいたる街道筋が天下道（参勤交代道）と定められて、城下町である松崎の地が宿場町として整備されていきました。

慶応二年（一八六六）の古文書によれば、松崎宿の総戸数は一二九軒で、旅籠が二六軒、煮売家が六軒あったと言われています。

旅籠油屋内部（市指定有形文化財）

旅籠油屋は江戸時代後期（十九世紀中頃）に建てられた大型の旅籠建築で、棟を分けた「主屋」と「座敷」から成る。油屋には西郷隆盛が宿泊したという伝承が残されているほか、西南戦争（一八七七）の際には、有栖川宮熾仁親王を総監とする征討軍の休憩場所として使用され、明治九年には乃木希典が昼食・休憩をとったことがその日記から明らかである。

江戸時代の看板
（喜平は油屋の亭主）

霊鷲寺（りょうじゅうじ）

松崎藩の有馬豊範が延宝八年（一六八〇）に三潴郡西牟田からこの地に移したのが始まり。
勅願寺で格式が高く、参勤交代の大名も駕籠や馬から下り、礼拝して通過したという。

油屋復元（イメージ）

桜並木

北構口（市指定史跡）

構口とは、宿場の入口に設けられた石垣と土塁のこと。南構口も合わせて4つの石垣が残るのは、全国的にも非常に貴重な例。

筑前・筑後国境石

小郡市乙隈と筑紫野市馬市との境に二本の大きな石柱が建っており、左側は「従是南筑後国」、右側は「従是北筑前国」と肉太の文字が彫られています。

これは久留米・福岡両藩が互いに国境を示すために建てたもので、以前は「従是南筑後領」（久留米藩）、「従是北筑前領」（福岡藩）という三十センチ角、高さ約二メートルの石を建ててていました。ところが、最初に福岡藩が基壇を持つ大型の国境石へと建て替えたため、これに負けじと久留米藩も現在の立派な国境石に建て替えたと言われています。

現存する二つの国境石は、後に建てられた筑後側がやや高い。江戸時代の薩摩街道は参勤交代道であり、ここを通過する九州の諸大名に対する久留米・福岡両藩のメンツをかけた暗黙の戦いがあったのかもしれません。

【松崎宿の見学等に関するお問い合わせは】
小郡市教育委員会文化財課（小郡市埋蔵文化財調査センター）　TEL 0942-75-7555　FAX 0942-75-2777
※松崎宿歴史資料館は常時開いておりませんので、事前に連絡をお願いします。なお、旅籠油屋も同時に見学できます。